

智嶺『法華文句』における信

望 月 海 淑

1

『法華文句』はその冒頭において、『法華玄義』が示す法華經の通題、品の別目、經文の分節、消文四意、經文釈の五をうけ、その中の消文四意について、列數・所以・引証・示相の四種釈があるとしているがその中で譬喩品の偈、

「若人有_レ能 信_三汝所說_一 則為_レ見_レ我 亦見_三於汝 及比丘僧 並諸菩薩_一」をとりあげて、

当_レ知隨_レ有_三所聞_一諦心觀察。於_三信心中_一得_レ見_三三寶_一。聞_レ說是法見_レ我是_三仏寶_一。見_レ汝等_一是_三僧寶_一。

としている。すなわち三寶とは仏・寶・僧であり、それは信心の中にて見らるゝとしているが、この注釈のもととなつた妙法華經の言葉に相應する梵文は

dr̥ṣṭās ca sarve imi bodhisattvā ye śraddadhe bhāṣitam agra mahyam.....⁽⁴⁾

(私によつて説かれた最上(の)の教え)を信するものは、一切の菩薩たちをみる)

となされているから、三寶を見る信は梵文の śraddhā で表現される信であるということが出来る。そして「如是」について『大智度論』の文を挙げた上で、

又如是者信順之辭。信則所聞之理念。順則師姿之道成。即第一義悉檀也⁽⁵⁾

智嶺『法華文句』における信(望月)

智顛『法華文句』における信（望月）

としている。この言葉は僧肇の『注維摩詰經』に同じものが見られ、『文句』はこの書の言葉を引用したものとと思われる。ただし、僧肇は即第一義悉檀なりとはせず、經無_レ豐約_一。非_レ信不_レ伝。故建言如是_一として、信があつて初めて伝えられるもので、その故にこそ如是で、如是の根幹には信がなければならぬことを示している。『文句』が第一義悉檀としたものも信があつて初めて三宝にまみえることが出来ることをふまえているからであらう。

されば、觀心積の項において『法華文句』は、右偈の譬喩品の偈を挙げ信に淺深あり見に樞実ありて、信は則ち機を論ず、見に樞実ありて種々に分別すること同じからざるは即ち教を分別するなり、又、法華の文を信すれば則ち實相の本を見る、若し身子の化を見れば則ち竜陀の本を見る、若し始成の釈尊を見たまつるときは亦久成の先仏を見たまつる等として、

又聞_レ經心信無_レ疑。覺_二此信心明淨_一。即是見_レ仏。⁽⁶⁾

となして、信が見仏のあり方であることを明示している。これらにおいて示される信は、明らかに三宝に対する信であるといえよう。

〔註〕

(1) 大正三四・二上「今帖_レ文為_レ四。一列數_二所以三引証四示相。」

(2) 同 九・一五中

(3) 同 三四・二中

(4) Sath. 93

(5) 大正三四・三上〜中

(6) 同 三八・三二八上

(7) 大正三四・三上〜中

(8) 同 同 ・ 三下

2

方便品を注釈した『文句』は、冒頭の「爾時世尊安祥而起」の語について

爾時者。当_レ爾之時_一也。仏常在_レ定何故言_レ起。此有_レ所_レ示。往古諸仏説_レ此經_一時。必前入_レ無量義_一即入_レ法華_一。今

仏亦爾。此示_レ世界悉檀哀從_レ定起_一。履歴法縁_一俱審諦。説必不_レ謬増_レ長物信_一。此示_レ為人悉檀哀從_レ定起_一。(1)

として、仏の説示は誤りあるものでなく、信を増長させるところから初まることを示している。このことは、仏の教えは正法であることから正法に対する信を勧めることにねらいがあることを示していると思われる。

この信を勧めるというあり方は、法華経理解の基本かもしれない。随所に勧信の語を見ることが出来る。

すなわち方便品最初の偈の中における「諸仏語無異 於仏所説法 当生大信力」の語について、これは諸仏の化道同じきことを論じ、勧信したものであり、仏は既に如実の語をもって勧信したのであるから、何事か疑うことがあろう、疑に因って謗を起す者を防ぐための故に勧信すべきのみ、であることを示している。(6)

しかし、この箇所の『妙法華経』に該当する梵文法華経は

yan Śariputro sugataḥ prabhāsate adhimukti-sampanna bhavahi tatra (4)

(舍利弗よ、善逝が語ったものに信解をなせ)

であり、 adhimukti が使われている。信解について『法華女義』は

智顛『法華文句』における信(望月)

隨信行位者。入見仏之名也非自智力。憑他生解。是人方便道。先雖有信以未習真。信不名行。……明信解位者。即是信行人。入修道。転名信解人一也。鈍根憑信進發真解。故名信解。

として、信あつても真を習わなければ信にして行ではないとし、信に憑つて進んで真の解を發す、これが信解だとしているから、信解とは信じたものに対して真の解がなければならぬことを示している。してみると、adhimuktiに關するこの箇所が『文句』が勸信となしているのとはいささか差があるように思われる。そしてこの差の将来は、adhimuktiを『妙法華經』が信力と決出したことに起因すると思われる。『文句』はこれに先だつて、『妙法華經』の「除諸菩薩衆信力堅固者」について、この句は「揀能入者。即円教十信。故言信力堅固者」としているが、この語句も梵文法華經は adhimukti をもつて示しているところである。『法華文句』はこの信力を sradha 信の力と理解したもので、adhimukti であるとは考えなかつたのであろう。信力には信解の意はあまりないので、奇異に思われる。ただ「仏既如实語勸信」すというから信は正法に対してのものであることを知りうる。

方便品の「舍利弗。汝等當一心信解受持仏語」以下の文について『文句』はこれは、物の謗心を止むもので、三あり、初めに釈迦の實説を勸信し、次に諸仏を勸信し、後に不虛を結成す、として仏の教法に対する信であることを示している。この法華經の文に対する梵文は、imesu buddha-dharmisu sradhadhavam me Sariputra patiyavakalpayata (舍利弗よ、この仏陀の法を信ぜよ、私を信頼せよ)とされているから、勸信とせられた信は、sradha の信である。そして、偈中の「若人信帰仏」以下の文にふれ、これは長行の「汝等當信仏之所説」以下の文にかかわるもので、これは果・因を挙げて勸信したものだとし、

若人信帰仏如来不欺誑二者。明仏心清淨。無明慳妬衆惡已断淨心中説。故是可信。

とし、仏の心は清淨で、清淨の心で説くのであるから欺誑することなく仏のすべての形、誓願すべてが、そこから出て来るものである故に信す可き道しかないことを明示している。尚、この若人信婦仏に関して梵文は信に関する表現を使用してはいない。

それ故に、方便品末の「汝等勿^レ有^レ疑」以下の偈の注釈において『文句』は、⁽¹³⁾
初一行半。勿^レ於^三可^レ信人^二生^レ疑。次又汝等舍利下一行。勿^レ於^三可^レ信法^二起^レ疑。⁽¹⁴⁾

といい、仏は法王であるから虚説せず、方便は権仮であり、眞実は妄ではない、法王の説く法を聞いて疑を生じてはいけない、と説き、偈末は教信を頌したものであるから、此の法を信すべきだ、それが「自知当作仏」への道であると示している。まさに仏・法に対する信を勧めたものだといえるであろう。しからば、勧められた信、信の対象等はそのように表現されるのであろうか。

法華経は仏と舍利弗との間の三止三請を語り、舍利弗が信 *śraddhā* を強調することを示しているが、『文句』はこのでの信に関しては何も言及していない。そして、ここ以降の七品半は上中下三根人のために説いたものだととして、その説明が繰りひろげられている。信のあり方ではなく、説法の内容の展開に意がそがれていたからであろう。しかし、五千起去に關し『文句』は、当機のものでない五千人が座にあったから仏は三止したのだとし、眞実のものを聞かんとするあり方、結縁の人が大切だとし、大通智勝如来の昔、無量の衆生が心に疑を生じたが、後、世々に師と供に生じて今は得度をした、この人々もそうだとし、

説^三大經^二時^三万五千億人。於^三是經中^二不^レ生^レ信心。是人於^三未來^二亦^レ當^レ得^レ信。⁽¹⁵⁾

としている。教えを聞いて信心を生じないものがあっても、結縁によって未來世には信を生じ得脱することを示して

いるから、信は正しきもの、悟りへの出発点としてとらえられていることを知りうる。したがって『妙法華経』の「汝等当信」について、虚妄なき法を勸信したもので、虚妄なき人は虚妄なき法を信するのだ、⁽¹⁶⁾としてゐる。ここで示される『妙法華経』の信は梵文では *śraddhā* をもつて語られているから、勸信とされる信はまさに *śraddhā* の信であろう。そしてそれは、揀_レ偽_レ教_レ信_二一_一の信である。⁽¹⁸⁾

一実を信ずるとはどのようなことなのか。五欲の中の煩惱濁を説明した『文句』は、疑網無_レ信不_レ可_レ告_レ実とし、⁽¹⁹⁾更に『妙法華経』の我が弟子で阿羅漢、辟支仏なりと謂うもので、仏は如来のみを教化する事を聞かず知らなければ弟子に非ずという語をうけて、

揀_レ偽_レ教_レ真。若_レ仏弟子自能信解。若不_二信_レ解_二非_二真_レ弟子_一。亦非_二羅_漢。教_二遍_レ時_衆令_二信_レ受_レ親。就_レ文_爲一。初_レ揀_二真_レ偽_一。……揀_又爲_二初_レ若不_レ聞不_レ知_二非_二真_レ弟子_一。次聞不_二信_レ受_二成_二増_レ上_レ慢_一。⁽²⁰⁾

としているから、信は真につながるもので、仏にかかわるものとしてとらえられていることになる。そして信ぜざるは増上慢となる、⁽²¹⁾ともなされるから、仏弟子たるの道は、法を信じ仏を信じて、そこから生ずるあり方しかないことになるであろう。すなわち、

真羅漢者。濁除根利知_レ非_二究竟_一信_二於_レ究竟_一。信_二真是_レ法_一未_二最後_レ身_一不_レ起_二上_レ慢_一。知_レ非_二究竟_一信_二於_レ究竟_一。即信_二理_一。無_レ増上_レ慢_一即_レ成_二行_一。信_レ則_レ信_レ教_レ是_レ爲_二教_一。是_レ仏弟子則_レ人一也。⁽²²⁾

といわれる。道は唯一のものしかない。

しかし『妙法華経』の「仏滅度後」以下を注釈して『文句』は、

若_レ仏在世正_レ說_二此_レ經_一。不_レ信_レ不_レ受_二非_二真_レ羅漢_一成_二増上_レ慢_一。若_レ仏滅後_レ方_レ得_二羅漢_一者。偏_レ執_二權_レ經_一不_レ信_二円_レ法_一。聽_二許

非_二増上慢_一。又仏雖_三入滅_二此経尚在_レ不_レ信_レ不_レ受。応_三是上慢_一耶。即得_二開除_一。仏滅度後雖_レ有_二此経_一。解_三其文義_一者。此人難_レ遇、致_レ令_二羅漢_レ不_レ信_レ不_レ解。亦聽_三許非_二増上慢_一。⁽²³⁾

とし、仏の在世、滅後にかかわらず法華経を信じ受けることが大切であることを強調している。これは仏——法華経の立場の上に立つもので、法華経にこそ仏の全身ましますものであることをとらえ、その法華経に会うこと難く、会い得るならば、それを信ずる道の唯一なるをふまえるからであらう。

尚、右の引用句、更にその前の引用句において見られるように、『文句』は信解の語を示し、更に信・受・解の語を示しているが、これは『妙法華経』が「汝等当_二一心信解。受持仏語_一」と語っているものをうけたものだと思われる。信解は普通 *adhimukti* に関する訳語であるが、梵文法華経は *śraddhā*, *pattya*, *avakāpaya* の三語をつかって示され、それらはそれぞれ、信、信頼、信順の意とされており、*adhimukti* は使用されてはおりない。『文句』の注釈は『妙法華経』の訳文によっていることは明白であるが、ただここでは不信、不受、不解を語るから、『妙法華経』の信解を、信と解という二つのことに理解したようにも思われる。

ただ方便品末の偈末に近い注釈において、『文句』は旧師の理解を挙げ、
若作_三三譬_二六譬_一十譬。於_三三用之文_二不_レ合。於_三四人信解_二乖離。是所_レ不_レ用。⁽²⁴⁾
とし、信解を理解に近い意に用いている。

更に方便品末の注釈で、仏は仏慧のための故に出でたまう、昔は障重くして機なく仏慧を説くことを得ざりしも、今は機発すれば説時であるとし、

昔衆生根鈍智小。恐_三其謗_二法障_一惡。故未_三是説時_一。今根利志大。聞必信解故仏歡喜。⁽²⁵⁾

智顛『法華文句』における信(望月)

と信解を使用している。ここでの信解については、『妙法華経』は「鈍根小智人 著相憍慢者 不能信是法」⁽²⁶⁾として、信を示しており、梵文法華経は *duḥśraddadhaṇaṃ etu bhaviyate 'dya nimitta-sañjiniṇa bāla-buddhinām | adhiṇāna-prāptāna avidvaśānām ime tu śroṣyanti hi badhisattvāḥ* ⁽²⁷⁾ (今、表相の觀念だけで、愚かで、無知で、増上慢となったものは信じ難いであろう。しかし実に、菩薩たちは聞くであろう) としているから、それは信ずること *śraddhā* を意味するのが本来であろう。何故に信解としたのか、明白ではないが、信ずることとともに理解することの意にもとらえていたのかもれない。

そして、「能聽是法者」を注釈して、これは孝ニ信受者難⁽²⁸⁾たものだと⁽²⁹⁾して信受を語っている。ここでの梵文は、*sudurīabha idrśakās ca sattvāḥ śrutvāḥ śraddhadhi agra-dharmān* ⁽³⁰⁾ (最高の法を聞いて信ずる衆生はこのように得がたい) であるから、この信受は信 *śraddhā* をうけたものと思われる。

[註]

- (1) 大正三四・四〇中
- (2) 同 九・六上
- (3) 同 三四・四五上
- (4) *Sadh.* 32
- (5) 大正三三・七二八上~中
- (6) 同 三四・四四下
- (7) *Sadh.* 31
- (8) 大正三四・四五上
- (9) 同 九・七下

- (10) 同 三四・五四上
- (11) Sath. 44
- (12) 大正三四・五五上 } 中
- (13) 同 九・一〇中
- (14) 同 三四・六三上
- (15) 同 同 四九上
- (16) 同三四・四九中「勸信無_二虛安_一法也。此理至深。……而今皆妙。恐_二物生_一謗故勸信也。信_下無_二虛妄_一人說_中無_二虛妄_一法也」
- (17) Sath. 39
- (18) 大正三四・五二下
- (19) 同 同 五三上
- (20) 同 同 五三下
- (21) 同 同 同
- (22) 同 同 同
- (23) 同 同 同
- (24) 同 同 五九上
- (25) 同 同 六二上
- (26) 同 九・一〇上
- (27) Sath. 57
- (28) 大正三四・六二下 } 六三上
- (29) Sath. 58

三車火宅の喩における車数について、『文句』は
 所_レ以_レ出_レ經勿_レ信_レ三人語_一。⁽¹⁾

とし、仏は声聞のために四諦の法を、縁覚のために十二因縁の法、菩薩のために六波羅蜜の法を説いたとし、華嚴經、十地經論、菩薩瓔珞經等の所説をあげて、過去の説示に批判を加えている。今は三車家四車家についての問題にはふれないが、右の引用句を挙げたのは、經典に対する信というあり方が明白に示されているからである。したがって、譬喩を説き終った仏が、仏の出世の本意を説く段の偈を注釈した『文句』は、

仏頌_三其譬_二則明_三不虛_一。明_下仏本意。即欲_レ説_レ一但五濁不_レ肯_三信受_一。故説_三於_三濁障既除還説_二一大_二即稱_レ本心_上也⁽²⁾
 とし、仏の教えは信受すべきものであるにもかかわらず信受しないのは、五濁の悪世であるからに外ならないことを示している。そして、

若人小智下。第二七行明_下小智障重不_二即信受_一。為_レ是方便開_三接引_上。⁽³⁾

というから、小智の者もまた信受せざる道につながることになる。この小智については、右の引用文の直前において、方便三乗所化の衆生は、皆これ昔日に結縁の仏子にして、亦皆同じく真如仏性あり、故に皆是菩薩というところからすると、結縁の仏子たることを知らず、真如仏性のない人ということになり、『妙法華經』は「若人小智深若愛欲_一」⁽⁴⁾としているから、それは広大な心、如是にもものを見ることの出来ない人の智ということであろう。してみると、信は如是になる正しい法を説く仏や法に対してのひたすらなものでなければならぬ。

「汝舍利弗 我此法印」以下を注釈した『文句』は、これ以下の六十五行の偈は、勸信流通。信者信_二仏説不説_一也。勸者勸_二可通不可通_一。有_二此二義一_三言_二勸信_一。

であるとして、仏の説示に対する信を勧めている。又、説不説について、

明_二如来利_三益世間_一之相_二也。通論三世利益。別論今_二三乘入信_一。阿鞞跋致是觀_二現在益_一。曾見者。觀_二過去去善_一為説也。信_二汝者見_三我。觀_二未來善_一為説也。下文云。若深信解者。見_二仏常住_三靈鷲_一即其義也。

とのべている。この箇所に関する『妙法華經』は、「若人有_二能_三信_二汝所説_一則為_二見_三我亦見_二於汝_一」となされ、この信について梵文法華經は、*ḍṣiṣās ca sarve imi bodhisattvā ye śraddadhe bhāsitam agra mahyam* (汝が説いた最勝(のもの)を信する者は、一切の菩薩たちを見る)と *śraddha* で表現している。してみると、ここで示される入信、信汝における信は *śraddha* の信であろう。

『妙法華經』は右の句に引き続いて、「汝舍利弗 尚於_二此經_一以_二信得_三入_一況余声聞 其余声聞 信_二仏語故_一」

隨順此經、非_二智_一と語り、梵文法華經は、*adhimukti-sāras* *Stuva āriputra kim vā punar mahya ime nya-śrāvākāḥ | ete 'pi śraddhāya manava yānti pratyātṃkam jñānu na caiva vidyate* (舍利弗、汝が信解が堅い、他の声聞もまた堅い。彼等も私への信によって入るのであり、各自の智は見られない)と語っている。

『妙法華經』では信の一語での表示であるが、梵文法華經は堅い信解 *adhimukti-sāra* 信 *śraddha* の二語を使っている。信が仏への信として使われ、信解が舍利弗の体得している境地のあり方として使われている時、この両者の間には相異がみられる。そして、この各自の智を岩本裕博士は、「各自の勝手気儘な智慧」と訳している。勝手気儘な智慧というのは、各自が自分でもっている智慧とか、自分に都合のよいようにものを判断する智慧とかのことで、

智顛『法華文句』における信(望月)

智顛『法華文句』における信(望月)

ありのままにものを見る仏の智慧・般若 Prajñā とは異っている。『妙法華經』が信仏語故隨順此經非己智分という時、この信は般若にかわるもので、仏語をひたすらに信ずる信 śraddhā のことである。このような信に対して、堅い信解 adhimukti-sāra を、体得した境地とするなら、それが深信解と『文句』によって表現されたものと思われる。⁽¹³⁾

されば「若人不信 毀謗此經 則斷一切 世間仏種」⁽¹⁴⁾をうけた『文句』は、

今經明「小善成仏」。此取「緣因」為「仏種」。若不「信」小善成仏。即斷「世間仏種也」。⁽¹⁵⁾

として、仏道への入口として信をとらえているのに対し、授記を得た舍利弗が仏に語った言葉、「爾時舍利弗白仏言」⁽¹⁶⁾以下を注釈した『文句』は、

此一品正是譬喻開三顯一。信解明「中根得解」。⁽¹⁷⁾

として、ここでの信解は中根人の得解であることを示し、体得した境地の意を説明することを使用している。

〔註〕

(1) 大正三四・七一上

(2) 同 同 七八中

(3) 同 同 七八下

(4) 同 九・一五上

(5) 同 同 一五中

(6) 同 三四・七八下

(7) 同 同 七九上、大正藏經では信汝者我者となっているが、『妙法華經』は「信汝所説則為見我」と示されているので、信汝者見我と改めた。

(8) 同 九・一五中

- (9) Sath. 93
- (10) 大正 九・一五中
- (11) Sath. 93
- (12) 坂本幸男・岩本裕訳注『法華経』上巻。二〇九
- (13) 深信解という語は分別功德品にあらわれるが、梵文法華経はこの語にあたる語として *adhimukti* を挙げてゐる。尚、詳しくは、拙著『法華経における信の研究序説』二八四〜二八五参照。
- (14) 大正 九・一五中
- (15) 同 三四・七九上
- (16) 同 九・一二中
- (17) 同 三四・六五下

4

信解品を注釈した『文句』は、嘉祥の『法華玄論』の三法を信解す、謂く一往化、随逐化、畢竟化(1)の文を引いた上で、自説を展開しているが、その後において、

此是領解段。近領(2)火宅遠領(2)方便。

として信解とは領解のことだとしている。これによると一仏乗の説示をしかと受けとめ領解することということになるのであろう。

しかして『文句』はこの領解といい切るのに先立ち、法華の座の前は豌豆の如しとし、

初聞(3)略説二動執生疑。広聞(3)五仏二蒙籠未(3)曉。今聞(3)譬喻二歡喜踊躍。信発解生疑去理明。歡喜是世界。信生是為人。疑去是对治。理明是第一義。以(3)是因縁一故名(3)信解品(3)。

智顛『法華文句』における信(望月)

智顛『法華文句』における信（望月）

としている。すなわち三車火宅の喩を聞くことによって喜びがおこり信が発し解が生ずるとしているが、これによると信解を信と解にわけているように思われる。信解品の信解は梵文法華經によると *adhimukti* であり、それは一語であるのに、このように信と解にわけたのは明らかではないが、仏の教えを信ずるには先ず歡喜があり、歡喜をおこすことによって信が生じ、信が確立した上で仏法を解する道が開けると判断をし、信と解が相ついで俱に相まって生じてくるとしたからであらうと思われる。

更に『文句』は続けて、

粟レ小大教一。初革レ凡成レ聖各有二次位一。但小乘信行從レ聞生レ解。苦忍明發信則稱レ行。法行歷レ法觀察。苦忍明發法則稱レ行。若信行人レ轉入二修道一轉名二信解一。……中根之人聞レ說二譬喩一。初破二疑惑一入二大乘見道一故名レ為レ信。進入二大乘修道一故名レ為レ解。⁽⁴⁾

として信解品と名づくのだとしている。ここで考えられることは、小乗の信行は仏の教えの聞解によってはじめられることになり、そこから信が生じ、更に信行のあり方が修道となる時に信解となるということ、信と信解とは相違があり、大乘の修道に入ることが信解だということであろう。してみると信解品を領解段となした一句は、仏の教えを信じ、しかと受とめた上で教えに相違しない行いの道が展開することを意味するであろうから、領解は単なる理解ではなく、仏の教えをそのままにとらえ歩みに展開をするところまでを意味しているよう。

それ故、『妙法華經』の「発希有心」⁽⁵⁾について『文句』は、発希有心とは近く譬喩四番の説を聞き希有の心発するを叙したものだとし、

心發故名レ之レ為レ信。以レ信故入二歡喜位一。⁽⁶⁾

とし、これが信解品といわれるゆえんだとしている。すなわち信解とは信によって入るもので、仏の教えたものと一体となり得た歡喜の位だとなるであろうから、それは全く単なる理解ではなく、修道に結びつくものでなければならぬ。そして修道に結びつくが故に領解と称せられたのではなからうか。

そして、長者窮子の喩を語る中で、法華経は我は年老い汝は小壯だ、汝は作す時、欺怠・瞋恨・怨言あることなし云云のくだりにおいて、これを注釈した『文句』は、

無三五過者。得三五力⁽⁸⁾離三五惡法⁽⁹⁾也。得⁽¹⁰⁾信力⁽¹¹⁾故不⁽¹²⁾欺。精進力故不⁽¹³⁾怠。念力故不⁽¹⁴⁾瞋。定力故不⁽¹⁵⁾恨。慧力故不⁽¹⁶⁾怨言⁽¹⁷⁾。

として、信・精進・念・定・慧の五力によって説明している。五力による信はもちろん *śraddhā* であるから、信力を得ているが故に欺ずという時、この信は仏・法等の絶対なるもの正なるものに対する信であることは言をまたない。⁽⁸⁾しかしてこの『文句』は、長者の偉容に驚いて逃げ出した窮子のために、長者が密に二人の人を遣し導いたことについて、⁽¹⁰⁾

此譬⁽¹¹⁾息大之後鹿苑說⁽¹²⁾。於⁽¹³⁾小即信革⁽¹⁴⁾凡成⁽¹⁵⁾聖⁽¹⁶⁾。

としているから、信の対象は完全に絶対なるものに相對するものでもなく、仏・法から生み出される方便の説示に對しても使われるものとなるであろう。

更に法華経は窮子が除糞をして二十年過ぎた後の事に關して、心相体信入出無難⁽¹⁷⁾と語っているが、『文句』は心相体信の故に家業を委せうるし、家業を諳じて悉く知見を備えているから大志を成就し、意志通泰の故に家業を付与出来、そこから歡喜が生ずるのだ、⁽¹⁸⁾とし、相体信とは互に相い信ずるなり、菩薩のために大乘を説くも虚に非らず、こ

智顛『法華文句』における信(望月)

智顛『法華文句』における信（望月）

れ即ち子の父を信するなり⁽¹⁴⁾とし、父子が互に信じあうのが相体信だとしてそれを仏と衆生との関係の中にあてはめて
いる。これからみると、この相体信で示される信もまた仏・法に対する信であることが解る。

しかして、この相体信に関して、

於我等前⁽¹⁵⁾説大乘法。亦是合⁽¹⁶⁾出入無難。以方便力⁽¹⁷⁾出弁⁽¹⁸⁾一乘。以⁽¹⁹⁾仏智力⁽²⁰⁾入明⁽²¹⁾実相。若不⁽²²⁾体信⁽²³⁾豈於⁽²⁴⁾我

前⁽²⁵⁾明⁽²⁶⁾仏慧⁽²⁷⁾耶。

とし、更に、

過⁽²⁸⁾是已後。心相体信彈訶⁽²⁹⁾貶斥。令⁽³⁰⁾恥⁽³¹⁾小⁽³²⁾慕⁽³³⁾大。蓋⁽³⁴⁾仏衣遮⁽³⁵⁾醜陋⁽³⁶⁾一⁽³⁷⁾恩。

と「世尊大恩」についての説明の中で相体信を語っている。相体信せざれば仏慧を明さんやといい、相体信し小を恥
じ大を慕わしめという時、この二箇所に見られる相体信の信は、仏慧・大（乗）に入るためのものであろう。

してみると、信解品の注釈における信と信解の場合、この二語においては意に相異があることは明白に思われる。

〔註〕

(1) 大正三四・七九中

(2) 同 同 ・七九下

(3) 同 同 ・同

(4) 同 同 ・同

(5) 同 九・一六中

(6) 同 三四・八〇上。心筈に関して『文句』には「中根之人聞⁽³⁸⁾説⁽³⁹⁾譬⁽⁴⁰⁾喻⁽⁴¹⁾。初破⁽⁴²⁾疑惑⁽⁴³⁾入⁽⁴⁴⁾大乘見道故名⁽⁴⁵⁾為⁽⁴⁶⁾信。進入⁽⁴⁷⁾大乘修道
故名⁽⁴⁸⁾為⁽⁴⁹⁾解」(大正三四・七九下)の言葉が見られる。

(7) 大正 九・一七上

- (8) 大正三四・八五下
- (9) 『文句』は釈法師品の中で、「信則信_レ理理即法身。」大正三四・二〇中としている。
- (10) 同 九・一七上
- (11) 同 三四・八六中
- (12) 同 九・一七上、尚、梵文法華経はこれについて信に關する記述をしてはいない。
- (13) 同 三四・八六中
- (14) 同 同、同下、この文意の後「仏知_レ此等見思已断聞必不_レ謗無漏根利聞微生_レ信。此即父信_レ子也」とつけ加えている。
- (15) 大正三四・八八中
- (16) 同 同・九〇中

5

安樂行品の末尾の「若後惡世中 説_レ是第一法_一 是人得_レ大利_一 如_レ上諸功德_二」を注釈して『文句』は、
 信根者。於_レ三宝得_レ堅固信_一。一切不_レ能_レ沮壞_一。……又信根於_レ如来_一。發_レ菩提心所_レ得_レ淨信心_一。

と語っている。第一法とは法華経のことであるから、仏滅後の弘経の勧めを説いたのが法華経であるが、弘経のためには弘経者の心根が定まっていなければならない。そこで『文句』は信根にはじまる五根を挙げて説いたと思われる。信根とは三宝を信ずというのは、阿含経以来の各經典に脈々と流れる基本姿勢であった。その信あれば一切沮壞すること能わずという時、その信は当然堅固信でなければならぬが、ことさらに堅固信と称したのは仏滅後の弘経という前提のためであろう。そして信根は淨信心を得るとするのは、古くは『俱舍論』に見ることが出来る。すなわち、

智顛『法華文句』における信（望月）

智顛『法華文句』における信(望月)

信謂心澄淨。 tatra śraddhā cetasaḥ prasādhā^(*) (その中で信は心の淨信である)とあるが、この説示をうけとめたものであろう。したがってここで示された信は śraddhā の意味する信であることは明白で、それは三宝に対し堅固なる信で、清淨なる信で、それ故にこそ法華經の弘經につき進むべきことを示したものと思われる。

そこで後地涌出品は地涌の菩薩を出現せしめて、虚空会の説法を展開するが、その中で仏は地涌の菩薩の質問に答えて、この衆生等は

始見⁽⁵⁾我身⁽⁶⁾二聞⁽⁷⁾我所説。即皆信受入⁽⁸⁾如来慧。

だとしている。これをうけた『文句』は、

今於⁽⁹⁾此經⁽¹⁰⁾二入⁽¹¹⁾於⁽¹²⁾仏慧。明文在⁽¹³⁾伎⁽¹⁴⁾不⁽¹⁵⁾須⁽¹⁶⁾疑也。

として、仏慧に入る道は法華經に対する信受であることを明言している。しかし、ここでの信受は梵文法華經による。

darśanād eva hi kula-putrāḥ śravaṇāc ca mamādhimucyante buddha-jñānam avatāranty avagāhante⁽⁷⁾
(実に善男子よ、私を見るだけ聞くだけで信解し、仏の智慧を理解し入っている)

であるから、信受と訳されたものは adhimukti である。この adhimukti は、śraddhā が三宝に対する信であるのに対し、信じたものにたいしゆるぎない心を向けるという確たる信といえると思われるから、⁽⁸⁾ここでの言葉は、法華經を信解し、その確たる境地から弘經への行いにつなげられて行くべきことを暗示していると思われる。それ故、法華經の「聞已信解 我等随喜⁽⁹⁾」について『文句』は、「所化人聞已信行我等随喜⁽¹⁰⁾」としたのである。

そして従地涌出品は弥勒の疑をのべているが、これについて『文句』は、「我等雖⁽¹¹⁾復信⁽¹²⁾仏」より以下は説示を請

う意を明したものだとし、

一為「現在」。我雖_レ未_レ達信而已矣。然諸菩薩下。第二為「未來」。淺行喜生_三誹謗_一。新然発意者謗墮_三惡道_一。不退者。雖_三信不_レ謗不_レ能_レ増_レ道_一。若為分別。謗者則生_レ信。信者則増_レ道_一。

と、信が増道につながるならなければならないことを明示している。梵文法華經によると、ここで示される信は *śraddhā* のことであるから⁽¹²⁾、先程の信解 *adhimukti* が使われた入仏慧よりは弱く、信をもって仏慧への道がはじまることを示しているように思われる。

如来寿量品は冒頭で仏語への信を強調して「汝等当信解如来誠諦之語⁽¹³⁾」というが、これをうけた『文句』は、広開_レ近顯_レ遠文為_レ二。先誠信次正答。仏旨論_レ誠衆受為_レ信。……誠是忠誠諦是審実。不_レ欺_レ於物一言則諸_レ真。昔七方便隨他意語非_レ告誠実。今隨自意語示_レ之以_レ要。故言_二誠諦_一。菩薩既奉_三誠誠_二不_三敢致_レ疑_一。聞必取_レ信信_三受誠言_一也⁽¹⁴⁾。

とされている。『妙法華經』は信解となっているのに、『文句』は信となしているのであるが、梵文法華經は、*avakāṣṭhī payadhvam me kula-putra abhisraddadhadvam tathagatasya bhūtan vācam vyāharataḥ* (善男子よ、如来の直実の語を信用し、信じ、頼るべし)として、*abhisraddhā* と表現をしている。この場合 *abhi* は接頭語であり *śraddhā* の意を強めようとしているのであるから、信と表現してさしつかえない。何故、『妙法華經』が信解と表現したのかは解らないが、如来の誠諦之語、真実の語を信ぜよと如来が誠誠するのであるから、それをそのまま信ずるといふ型の方がよからうと思われる。『文句』が菩薩は既に誠誠しているから疑わず聞かば必ず信を取るといふのは、そのあたりを押さえているからであろう。そして、法華經の「我以_二仏眼_一。觀_二其信等諸根利鈍_一」をうけた⁽¹⁷⁾

智顛『法華文句』における信(望月)

智顛『法華文句』における信（望月）

『文句』は、

信等諸根者。信等五根。慧根即了因。余根即緣因⁽¹⁸⁾

としているから、これは信・勤・念・定・慧の五根のことで、信 *sradha* は第一の出発点であり、慧に到達する歩みに結びつくべきものと阿含経からの流れの中にとらえられていることを知ることが出来る。

分別功德品の「復有二八世界。微塵數衆生皆發阿耨多羅三藐三菩提心⁽²⁰⁾」をうけた『文句』は、

八世界發心者。六根清淨人。初入三十信位一也⁽²¹⁾

としているが、天台『四教儀』によると十信には、別教の十信と円教の十信とがあり、別教の十信は信・念・精進・慧・定・不退・廻向・護法・戒・願であるとして菩薩の五十二位を展開している。しかして、この十信は『菩薩瓔珞本業経』に示されるもので、それによると、菩薩行は十住・十行・十廻向・十地・等覺と妙覺の四十二位を次第に展開するものだとし、初住に入る前に十順名字あり菩薩は常に十心を行はずとして、

所謂信心念心精進心慧心定心不退心廻向心護心戒心願心。仏子。修⁽²²⁾行是心。若經三劫二劫三劫。乃得入⁽²³⁾初住位中。

とされている。すなわち『四教儀』引用の十信は、これをうけたものと思われるが、ここでは四十二位の前段階としての初発心住とされている。『四教儀』はこの十信を四十二位に加えて五十二位としており、別教では五十二位を七科にわけ、更にこれを凡・聖にわけて、凡の中の信を外凡とし住・行・向を内凡とし、他は因の等覺、果の妙覺の聖であるとしている。すなわち外凡とせられた信が十信である。そして円教に関して『四教儀』は位次に八ありとし、五品弟子・十信・十住・十行・十廻向・十地・等覺・妙覺を挙げ、五品弟子位は外凡の位で、これは別教の十信と同

して、次の十信の位について、

次進²³二六根清淨位²³即是十信。

としているが、これは分別功德品に関する前掲の『文句』の引用句と同じである。『四教儀』はこれについて、初信に見惑を断じ眞理を顯し、二信より七信に至って思惑を断じ尽し、八信より十信に至り界内外の塵沙の惑を断じ尽す²⁴、
としているから、前掲の『文句』の言葉も一切の惑を断じ尽したことが八世界の発心者と理解してよいであろう。

そして『文句』は、一念信解・略解言趣・広為他說・深信觀成の現在の四信、初隨喜・誦誦・說法・兼行六度・正行六度の滅後の五品を説いている。この中の一念信解は法華經の「聞²⁵仏壽命長遠如是。乃至能生²⁵一念信解」。所得功德無²⁵有²⁵限量²⁵」をうけたものであるが、

今²⁶積²⁶二²⁶一念信解²⁶者。謂²⁶隨²⁶所²⁶聞²⁶處²⁶豁²⁶爾²⁶開²⁶明²⁶。隨²⁶語²⁶而²⁶入²⁶無²⁶有²⁶三²⁶聖²⁶礙²⁶。信²⁶一²⁶切²⁶法²⁶皆²⁶是²⁶仏²⁶法²⁶。又²⁶信²⁶三²⁶仏²⁶法²⁶不²⁶隔²⁶二²⁶切²⁶法²⁶。不²⁶得²⁶三²⁶仏²⁶法²⁶不²⁶得²⁶二²⁶切²⁶法²⁶。而²⁶見²⁶二²⁶切²⁶法²⁶。亦²⁶見²⁶仏²⁶法²⁶即²⁶一²⁶而²⁶三²⁶。即²⁶三²⁶而²⁶一²⁶。亦²⁶是²⁶行²⁶三²⁶於²⁶非²⁶道²⁶通²⁶達²⁶仏²⁶道²⁶。行²⁶三²⁶於²⁶仏²⁶道²⁶通²⁶達²⁶一²⁶切²⁶道²⁶。不²⁶得²⁶得²⁶仏²⁶道²⁶一²⁶切²⁶道²⁶。而²⁶通²⁶達²⁶仏²⁶道²⁶一²⁶切²⁶道²⁶。……無²⁶疑²⁶曰²⁶信²⁶。明²⁶了²⁶曰²⁶解²⁶。是²⁶為²⁶二²⁶一念信²⁶解²⁶心²⁶也²⁶。

と『文句』は注釈している。すなわち、信解を信と解にわけて、無疑と明了に區別しており、これが俱になつて働きはじめて、若し坐して恩惟すれば、恩惟した所に随つて豁然として開語し²⁷三諦に通達することになるとしている。そしてこのような信解を鉄輪位というのだと。

梵文法華經によるとこのところは、

tathāgatāyus-pramāṇa-nirdeśa-dharmaparyāye nirdeśyamāṇe satvair eka-cittōpādīkāpy adhimuktīr

智頭『法華文句』における信(望月)

智顯『法華文句』における信（望月）

utpādībhīśraddadhānatā vā kṛtā kīyat(28)

（如来の寿命長遠の説示の法門が説かれている時に、衆生たちが一度でも心をおこし、信解を生じ、信をなしたとしよう）

となされているから、信解は信 *śraddha* と信解 *adhimukti* の両語で語られているから、『文句』の理解はこれと相通じている。そして信解は、核部建博士によると、対象をしっかりと捉えてそれを理解し確認する心のはたらきを意味すると考えて誤りはないであろうとし、*adhimukti* は一方で「何かに」意を向ける傾向を意味し、他方で「疑惑せぬこと、確信」を意味する(29)とされているから、それは豁然と開悟し三諦に通達するという『文句』の意に通じている。

それ故に、信解 *adhimukti* は単なる理解ではなく、仏道の全てに及ぶものでなければならぬ。しかし、

一解。未_三是具足鉄輪_一。乃是十信之初心。其人未_レ得_二六根清淨_一。故非_二鉄輪正位_一也。(30)

といわれるのもそのためであろう。ここでの一解は鉄輪位にないので凡外の信で、信解ではないことになるであろう。それ故にこそ、

願我於_二未來_一者。起_二慈悲願_一也。藉_二久行願_一聞_レ經信解。今之初品始聞_二此經_一一念信解。功等_二久行_一。亦乃過_レ之也。(31)
といわれる。すなわち、法華經を信じ、それをしっかりと理解し確信しゆるぎない心のあり方は、仏の境地を体得するあり方なのであり、そこをもって豁然として開悟し三諦に通達といわれたのであろう。

しかし、『文句』は一念信解から始まる略言言趣、広為他説、深信觀成と論をすすめて、初の二品は但だ信解で未だ敷説しないから開慧の位で、広為他説は他のために説くから思慧の位で、深信觀成は上の三品を備え更に觀行を

修することを加え、禪に入って慧を用い想成じ相なり、有余の実報の両土の相貌を見るから修慧の位だとし、浅より深にゆき六根清淨の十信の位となるとしている。⁽⁸²⁾ 信は慧 *pañña* をめざすものだというあり方は、すでに阿含經以来の經典に見られたことであるが、『文句』の理解もまた、その上に立っていることを認めうるであろうが、そこそゆるぎない境地だからであろう。

そして、滅後の五品に関して論述した『文句』は、

結^三此五品。前三人是聞慧位。兼行六度思慧位。正行六度は修慧位。都是十信前耳。或云。初隨喜品。是入^三信心位。分^三二品^二為^三兩心^一。五品即十信心。即是鉄輪六根清淨位也。⁽⁸³⁾

としている。

〔註〕

- (1) 大正 九・三九下
- (2) 同 三四・一二四中
- (3) 拙著『法華經における信の研究序説』参照
- (4) 大正二九・一七八中、Abhidharmakoshaśāstra of Vasubandhu ed. by p. pradhan 55
- (5) 同 九・四〇中
- (6) 同 三四・一二五下
- (7) Sādh. 301~2
- (8) 信 *śraddha* 信解 *adhimukti* については、多くの学者によって言及がなされている。その要約が拙著『法華經における信の研究序説』にある。一〇~十六
- (9) 大正 九・四〇中、Sādh. 302
- (10) 同 三四・一二五下

智顛『法華文句』における信（望月）

智顓『法華文句』における信（望月）

- (11) 大正三四・一二六上
- (12) Sath. 312
- (13) 大正 九・四二中
- (14) 同三四・一二九中～下
- (15) Sath. 315
- (16) 拙著・前掲書・五四八～五五〇参照
- (17) 大正 九・四二下、Sath. 317
- (18) 同三四・一三〇中
- (19) 拙著・前掲書・二一、三五、四五、六七等参照
- (20) 大正 九・四四上
- (21) 同三四・一三六下
- (22) 同二四・一〇二下
- (23) 同四六・七七九中
- (24) 同同・七七九中～下
- (25) 同 九・四四下
- (26) 同三四・一三七中～下
- (27) 同同・一三七下
- (28) Sath. 332
- (29) 桜部建『仏教語の研究』三七～三八
- (30) 大正三四・一三七下
- (31) 同同・同
- (32) 同同・一三七下～一三八上
- (33) 同同・一三八中